

チンコツきり

長谷川時雨

青空文庫

アンポンタンはぼんやりと人の顔を眺める癖があったので、

「いやだねおやつちゃん、私の顔に出車だしでも通るのかね。」

さすがの藤木さんもテレテ、その頃の月つきなみ並な警句をいった。

小伝馬町の牢屋の原を廻めぐる四角四面の町々に、アンポンタンの

友達の分譜ぶんぷがあり、学んだ学校があり、長唄稽古所があり、親の

知しりあい合の家もあったから、私がポカんと立止って眺めているな

かしらが多くあった。もともと牢屋の原の居廻りは、日本橋とい

う主都の中央でありながら、今でいえば新開しんかいの町だけに、神田

区上町との間に流れる溝川とどぶの河岸についた、もとの大牢の裏手の

方は淋さびしいパラツとした町で、呆ほうけたような空気だった。そのか

わりに今いえば日本橋区内の何処どこでもに見られない新職業があつた。古鉄屑屋の前に立つて、暗い土間の隅の釜で、活字が鉛に解かされてゆくのを何時いつまでも眺めたりしていた。古ふるむしろ 庭に山と積んだ、汚ない細かい鉄屑かなくずが塵埃ごみと一緒に箕みで釜の中へはかりこまれると、ギラギラした銀色の重い水に解けてゆくのを、いくから見ても厭あきなかつた。それが泥の中へこぼされると、なまこ型にかたまるのも面白かつた。またある板がこいの中を覗のぞくと、そこは地獄のように炎が嚇かっかく々と燃もっていて、裸の小僧さんが棒のさきへ何かつけて吹くと、洋燈ランペのホヤになるので息をのんで覗のぞいていた。小さな瓶や、大きな瓶もすぐ出来上るのを見ていたが、暑さと苦しそうなのが、この見物とは反対に、こしらえている小

僧さんたちにすまなく思わせた。

表通りには鉄道馬車の線路のある日本の中央の幹線道路でありながら、牢獄ろうごくのあつた時代からはかなり過ぎてゐるのに、人通りがなくて、道中の広い通りには野道のように草が生えていた。ガラス工場などは板屋根だからよけいに草が茂つていたが、瓦かわら茸ぶきの屋根にも青々とした草が黄色い花をつけていた。

藤木氏がチンコツきりをしていたのもその近所だった。はじめ私が発見した時、私は藤木氏なんぞ目にも入れなかつた。忙せわしなく煙草の葉を揃える人の手元や、ジャキジャキと煙草の葉を刻きんでいる職人の手許てもとを夢中になつて眺めていた。

その日の夕方、いつものように来て、藤木さんは母こぼに眩くらしい

た。

「今日つてきようは弱つたのなんのつて、汗が出たね。だんまりはいいがね、いつまでもいつまでも立って見ているのだからね。」

こつちのほうかなにか言わなくちやならない気がして——」

だが真から心配そうにもいつた。

「あんな道草していて、稽古けいこにほんとにゆくのかしら？」

その翌日あたしは、藤木さんのチンコツきを立って見ていてはいけないと誠めいましられた。そのついでに母と誰かが話していたのだが、チンコツきりおじさんは、職人としても好よくないのだそうだ。細君の方は目が高くて、煙草の葉を選よるのにたしかで早い、大事な内職人なので、その方を手離したくないために、役にた

ない御亭主も雇っておいてくれる。家でも口やかましい人が外に出ているのだから、大切に、おがむようにして出してやる。店の方でも細君の方に沢山仕事をさせたいので、機嫌をとっておいてくれるので、それでも三日目位にはあきてしまうのだと言った。

藤木さんはその頃が貧窮のどん底だったが、細君の前だけでは、封建的殿様ぶりを發揮して、怒鳴ってばかりいた。蜜柑箱みかんにキンタマ火鉢を入れたのが長火鉢かわりの生活くらしでいて、

「貴様なんぞはボティフリボティフリの嬢かかあにでもなれ。」

というのが口癖で、魚売さかなやは自分よりよほど身分違い——さも低級でもあるように賤いやしめて罵ののしる習慣くせがあつたのだ。貞淑な細君は、

そんな事を言われても尤もつとものように押だまつて辛棒強く働いていた。手跡はお家流をよく書き、腰折れの一首もものし、貧乏の中に風流を解するゆとりもあり、容きりよう貌は木魚の顔のおじいさんの娘なりに、似てはいたが醜くはなかつた。

娘のおあさは色の黒いところと、人のよい正直者の表標のような光りをもつくせに、ちよいと見は鋭く見える眼つきを父親からもらつて、母親からは祖父ゆずりのお出額でこを与えられた。髪の毛の濃い小ぢんまりした小さな娘だつた。

ある日、藤木夫妻と娘とが、私の祖母と母の前に並んで座つていた。あたしもそばへ行つて座つた。丁度父が外おもてから帰つて来て客のまたせてある室へやへゆきがけに通ると、母が継すがるように言つた。

「おあさが小蒔屋こまきやへ行くことにきまりました——」

「そうか、金助の家うちか？」

「さようでございます、清元きよもとが大層気に入りました——踊りも質たちがいいと仰おつしやってくださいますので——」

藤木の細君がいった。

小蒔屋——柳橋やなぎばしの芸妓屋の名だった。家へも来るが、両国

広小路——電車道路となつたが——の、両国橋にむかつて右側に、

「芭蕉ばしやう」という大きな薬種屋があつて、芭蕉の葉が一葉大きく

青く彫刻した看板が棟にあげてある店だった。その薬種屋は「正久の——」という名人の鍼灸はりい医の家で広い店二階に一ぱい患者が詰めかけていた。正久さんは盲目だが上品な老人で、供ともがついて祖

母のために療治に来てくれたが、なにしろ患者が多いので祖母の方から通う日も多かつた。その待合せは所がら芸妓やや料理店おちややの人が多く、藤木夫婦の望みと抱妓かかえをほしがっている小蒔屋との交渉が、おもいがけなく私の祖母から出来上つてしまったのだつた。

おあさのために御馳走がならべられて、口々に褒ほめた。

「おあさは孝行ものだ、親孝行だ。」

父までが藤木さんに杯口ちやくを与えながらいった。

「おれの家うちでも女の子が多いから、芸妓やはじめると資金入もとでいらずだが——」

十とおばかりの従姉いとこと、私はだんまりで、二人ともこぼれない涙に

瞳が光っていた。おなじようにムンヅリしていたが、子供心にも思うことは違っていたのかもしれない。私は子供心には言いあらわせない反抗心がグイグイと胸をつきあげていた。その時、父も厭いやだった、褒めそやす母は一層憎かった。ふだんは好きな祖母も、そんな世話をしたかと思うと悲しかった。もとより、芸げい妓しやは美しいものとして、その他の悪いことは知っていようはずもないのに、なぜだか、なんとも言えない泣きたい思いを堪えていた。

「親孝行なんて、親孝行なんて——」

なあんだ——ただそう叫びたかった。みんなにむしやぶりつきたい、わけのわからないむしやくしやだった。

「そんな親孝行なんぞしたくもない。」

そう言いたかつたのだ、お金で——金のねうちを知らない子供には、物品とおなじように金で子供を売ってしまう親がただ憎かつたのだ。それを褒めそやす自分の親たちがなお憎かつた、厭だつた。子供はもつともつと親をよく思っているのに——私はやりどころのないわびしさを従姉にむけて睨めつけた。従姉は、蝶々鬚まげを光らせて、私の眼を避けてうつむいた。上から釣るされていゝる大洋燈の灯ひに、蝶々の簪かんざしがペカペカした。

この下地したじツ子が、二、三年たつてから、盆暮れの宿下やどおりに母親につれられて来て、柳橋へ帰るかえりに寄つた。緋ひの板いた縮たじめ緬ぢりめんに鶯色うぐいすの縷子しゆすの昼夜帯はらあわせを、ぬき衣紋えもんの背中にお太鼓に結

んで、反そった唐人鬘とうじんまげに結むすつてきたが、帰りしなには、差く櫛しや珊瑚ま珠まのついた鬘べっこう 甲かの簪かんざしを懐紙ふくしにつつんで帯の間へ大事だいじそうにし
まいこみ、褌つまさきを帯止おしめにはさんで、お尻しりをはしよつた。

私はさびしい気持きもちでそれを眺ながめていた。私の着物きものを従姉じゆわいが着る
のでよけい親おやしみが深ふかかったのに、なんとなくその日の従姉じゆわいは私
から離はなれていつてしまつていた。おあさちゃんの体ていの方が借かりも
のになつて、着物きものや簪かんざしの方が巾はばをきかせていた。

その頃ころになつて、藤木ふじぎさんの世帯しよたいは、すこしばかりゆとりが
出来できた様子ようすになつた。根岸ねがしの鶯うぐいすだに 谷やの奥おくの植木師うえきやの庭にわつづきの、
小態こていな寮せうの寮番せうばんのような事をしながら、相変あひまらずチンコツきりと
煙草たばこの葉選はよりの内職うちやくだつた。妹娘いもうとは常磐津ときわづを仕込しこんでいたが、勝

川のおばさんの方へ多くいつていた。

おとなしがわ

音無川を——いま現今では汚れた溝川になつてゐるが——前にし

た、静かな往来にむかつて、百姓家の角に、竹で綱んだ片折戸かたおりど

をもつた、粗末ではあるがかんじやく閑寂な小屋に、湯川氏のおばあさ

んが、ポツンと一人住んでいたころなので、私が子供のくせにふ

さぎの虫を起すと、母はでようじよう出養生の意味で、あの心持ちの至極の

んびりしたおばあさんの家へ私をやつてくれるのであつた。

前にはざわざわながれ細流がつぶやいている。向うの藪には赤い椿がつばき

咲いて、春の日は流れにポタンと花がおちる。夏ははちすの花が

早あさあけ抹もやに深い靄もやの中にさいて、藪の蜘蛛くもの巣にも花にも朝露あさつゆがキ

ラキラと光つて空がはれていつた。藪には土橋をかけて、かぶきも冠木

門の大百姓の広庭と、奥深く大きな茅屋根が見えていた。お
 ぎよう
 行の松にむかつた方には狩野という絵師の家が、鬱蒼した中に
 建つていた。

お行の松は、湯川のおばあさんの茅屋からは左斜めの向側にあ
 つて、板小屋の不動堂とその後寒竹の茂みのある幽邃な一區
 域になつて、音無川が道路とへだてていた。裏の百姓家も植木師
 をかねていたので、おばあさんの小屋の台所の方も、雁来紅、
 あおい
 天竺葵、ほうせんか
 鳳仙花、やぐるまそう
 矢車草などが低い垣根越しに見えて、鶏の
 とぎ
 高く刻をつくるのがきこえた。おばあさんの片折戸のせまい空地
 おとぎ
 も弟切り草が苔のようになえて、水引草、秋海棠、おしろい
 の花もこぼれて咲いていた。

あたしにはその家がめずらしくつてたまらなかつた。車馬の轟とどろきはめつたに聞こえず、人が尋ねてくるではなし、昼間家の中をあおがえる青蛙が飛んでゐるし、道ばたの小家に簾すだれを釣つて、朝、夜明から戸をあけて蚊帳かやは釣りつばなしで寝ていると、まだほの暗い中を人声がして前の川で顔を洗つてゐる。

「おばあさん、あれはなに？」

ときくと、あの顔の大きなおばあさんは、あたしが大人のような返事をして、

「吉原よしわらがえりだろうよ、朝がえりだね、ふられて帰る果報者つてね。」

「降られてはいやしないよ、お天気だよ。」

とアンポンタンとちやんぼんな問答をする。そうかと思うと、

「入谷いりやへ朝顔を見にゆこうかね、それは美事みごとだよ。」

「田圃たんぼへ蓮はすの咲くのを見に行こうよう、おばあさん。ポンポンて音がするってね？」

「この子はまあ、田圃が好きで、お百姓のお嫁さんにしなければなるまいかねえ。」

あたしは顔も洗わずに、湿った土の上へ一足、片折戸を開けて飛出すと、向うの大百姓の家のお嫁さんが生しょうが姜がを堰せきでせつせと洗っていた。名物の谷中やなか生姜は葉が青く生々しんじんしていて、黒い土が落とされると、真白な根のきわにほの赤い皮が、風呂おゆから出た奇麗な人の血色のように鮮かに目立った。ボンヤリ見ている私は手

伝いたくてウズウズしている。小僧さんが天^{てん}秤^{びんぼう}棒^{ぼう}が撓^{たわ}むほど、籠^{かご}に一^いぱいの大きな瓜^{うり}を担^{かか}いで来て、土^ど橋^{ばし}をギチギチ急^いいで渡^わつてた。

町の子のあたしが、笹舟を流すことを知^しつたのも、麦^あ笛^{ふえ}を吹^ふいたのも、夜^よ蒔^まきの瓜^{うり}の講^{こう}釈^{しやく}をきいたのも、田^で圃^ぼへどじようを突^つき行^いつたのも、根^ね岸^{がし}の里^り住^{じゆ}居^ぐのたまものだ^たつた。お^おばあ^あさん^{さん}は切^きれの巾^{きんちやく}着^ぎの中^{ちゆう}味^みを勘^{かん}定^{てい}して、あ^あたし^しのお^おや^やつ^つや好^{こう}き^きな塩^{しおじや}鮭^けの一切^{いっけつ}れを^を買^かい^いに^にい^いつ^つた。ま^まだ上^{じやう}野^の山^{さん}下^かの青^{せい}石^{せき}横^{ごう}町^{ちやう}に^にい^いる^る時^{とき}分^{ぶん}に、あ^あたし^しは雨^{あま}上^{あが}りに三^{さん}枚^{まい}橋^{はし}下^かへ小^{せう}魚^{ぎよ}を掬^{すく}い^いに^にい^いつ^つたり、山^{さん}内^{ない}へ椎^{しうい}の^の実^みを拾^{しゆう}い^いに^にい^いつ^つて、夜^よにな^なるとお^おばあ^あさん^{さん}の不^ふ思^し議^ぎな話^わを^をき^きき^きな^なが^がら煎^いつ^つて^ても^もら^らつ^つて、椎^{しうい}の^の実^みの^の味^みを^を知^しつ^つた。秋^{あき}の^のは^はじ^じめ

になると、

「蓮はすの実はいらないか、蓮の実はいらないか。」

と短く折つた蓮の莖しべを抱えて、売つてくれる子とも馴染なじみになつて、蓮の実の味も知つた。そんな事は日本橋油町あた辺りの子供の誰一人知つてはいなかつた。

田圃道を歩きながら、おばあさんは錦にしきえ絵のような話をはじめ
る。

「根岸にはお大名の別しもやしき荘が沢山あるけれど、加賀様のお姫さまがたは揃つてお美しかつた。お前さん、桜はなの咲くころに、お三さ
んかた方もお四方よかたも揃つてお出いでになると、まるで田舎源氏の挿絵のよ

うさね。」

「おばあさん、お姫様はピラピラをさげてる？」

「お桂かけは召まていないが、お振袖あけぼのぞめで、曙あけぼのぞめ染ぞめで、それはそれは奇麗きれいですよ、お前まへさんに見みせたいね。ほんと！ 桜さくらの花はなよりものい
う花はながきれいさ。」

あたしにはまたちよいとこの会はなし話が分わらなくなる。牛ちち乳ちちを吞のま
してくれうちる家かどの門かどに來きた。

「ここみかわしまらはもう三河島田圃。」

とおばあさんがいったから、三河島の方まへ寄よつていたのであろう。
ひとかまえ

一い構かまの百姓家ひやくしやうけは牧場ぼくじやうになつていた。牛うしの牧場ぼくじやうなんてそれまで
見た事こともない私わたしだつた。優やさしい眼まなこをした黄きと白しろの斑まだら牛うしが寝ねそ
べつていて、可愛こゝろしい仔牛こゝろしがいたが、生なまきた牛うしの添そばにそばいつた事ことはな

いし、臆病な私は怖^{こわ}かった。若いキリリとした女房^{おかみ}さんが、堀井戸に釣^かるしてあつた罐^{かん}からコップへ牛乳を酌^くんでくれた。濃い、甘い、冷たい牛乳だつた。

「お砂糖がはいっているよ。」

と私^{よろこ}が悦んでいうと、おかみさんとお亭主が笑つていった。

「お砂糖はいれてないけれど、絞^{うま}りたての甘いのをあげたのさ。」
こんな風^{ふう}におばあさんはよく私を連れて他家^{よそ}へいった。私が本を読みたがると、何処^{どこ}からか聞きだしてきてくれて、私を貸本屋へつれてゆくといつた。

毎日二時過ぎると小さなお釜^{かま}でお湯を湧^{わか}して、盥^{たらい}へ行水のお湯をとつてくれた。私は裏からも表からも見透^{みすか}しの場処でのんきに

盥の中へ座る。雨蛙にもお湯をぶっかける。大きな山蟻ありが逃出すのを面白がる。或時あるは暮ひきがえると睨めっこしながら盥の中にかしこまっている。涼しい風にくしやみをするとおばあさんが声をかける。

「さあ、もういいよ。」

汗知らずをまだらにはたきつけて貸本屋さんへ出かける――

貸本屋も御隠居処なのである。寒竹の垣根つづきの細道を、寒竹の子を抜きながらゆくと何処やぶうぐいすでか藪やぶが鳴いている。

カラカラと、辻すべりのいい門の戸をあけると、踏ふみいし石だけ残して、

いろとりどりの松葉牡丹ぼたんが一面。軒下のりに下っている鈴をならすと、

切髪きれいの綺麗な女隠居が出てきて、両手を揃えて丁寧におじぎをした。

『妙々車』 『浅間嶽』などが私の膝の前に高く積み重ねられた。

私は幾度か見たものもあればまだ一度も開いたことのないものもあつた。小さな私が一心を魅とられてしまっている時にこの二人の閑人——老婆がどんな話をしていたのか、思出すことも出来ない。

「これだけ拝借して、一日三銭でよいと仰おつしやったよ。」

湯川のおばあさんは帰り道でそういつた。私の本の見方が、大人より大切にして、キチンと座って読んでいるのに、先方の老女が感心して安くしてくれたのだと、——それにしても、あんまり少額すけないお礼に驚いた。

「宅にあるのを、みんな読ましておあげなさい。お好すきなものを見せないなんて、わからない親御おやごさんだ。」

そうも言ったのだそうだ。けれどその家にはくさ草紙よりほかなかった。

夕暮が来て、草双紙にもあきると、おばあさんを誘つてまた田圃に出た。蛩ほたるがチラホラ飛んでいる。小さな棺を担がした人がスタスタ通つてゆく。前の堰せきでは農具を洗っている。鍬くわが暗やみにも光る——その側そばで、大きな瓜を二ツに裂いている。

「この種をも一度蒔まくので、熟うれすぎたから塩押しにするのだ。」と教えてくれる。三河島田圃の方の空が明るくて、賑やかな物音のする心地こころちがすると、あつちが吉原だと言つた。昼間よりも、田圃みちを人が通つている。

谷中芋いもぎ坂かの名物羽二重団子はぶたえだんごがアンポンタンのお茶受けに好き

だった。その団子屋の近くは藤木さんの住居になった寮だ。腰障子の土間の広い、荒っぽい材組きぐみで、柱なんぞも太かったが、簡素な造りで、藤木さんは手拭ゆかたを着て、目白めじろをおとりにして木立に小鳥籠いづくが幾個かかけてあった。瑠璃るりの朝顔が大輪に咲くのを自慢した。

朝顔を見にいった朝は、なんでも朝飯を食べていってくれと夫婦していった。それは私に代表させた私一家へ対しての、夫婦ふたりの感謝だったのかも知れない。子供だけれど潔癖だからと、白い御飯を光るように炊たいてくださった。お豆腐の上に、まっ青な、香かおりの高い紫蘇しその葉がきざんで乗せてあるのが私をよろこばせた。

「妙なものが好きだ。」

夫^{ふたり}婦^りは私^{わたし}のお膳^{ぜん}の前^{まえ}にいて、煽^{あお}いでくれながらいった。

「お豆腐^{とうふ}のきらいなのは知^しっているから、どうしたら好^すいかと心配^{しんぱい}したのだつた。青^{あお}いものが好^すきだから氣^きに入るかと思^{おも}つて——」
木^きの枝^{えだ}にかけわたした竹^{たけ}棹^{ざお}に蔓^{つる}がまきついて、唐^{とう}茄子^{なす}が二ツなつていた。

「朝^{あさ}顔^{がほ}につるべとられて——とかなんとかいうが、おやつちゃん、宅^{うち}じゃあね、あれごらん、唐^{とう}茄子^{なす}に乾^{ほし}棹^{ざお}とられてだよ。」

藤^{ふじ}木^きさんは秀^{ひで}逸^{とく}らしくいつて、

「だけど、うんと大きくして、油^{あぶら}町^{まち}へもつてつたつて、こいつあひつあひつ一個^{ひとつ}でも、とてもあまるつて、あの人^{ひと}数^{かず}でもうならせるほど大きくするんだ。」

「桃の中から桃太郎が出るから、唐茄子から何が出るか、あたくしやあ楽しみだよ。」

と湯川おばあさんがいった。

「違えねえ、飴あめの中からお多福さんが出たよだ——さあさあ、これなる唐茄子から何が出ますか代価だいは見みてのおもどり——ハッ来た、とくりやあたいたしたものだが、文福茶釜じやあるめえし、鍋に入れたからって踊りだしやあしまい。」

藤木さんがそんな戯じょうだん談をいった時に、唐茄子の中にははいつていたものがあつたのだった。あんまり大きくなるが様子が変だからと、庖丁ぼうちようを入れたら小蛇こへびが断きれて出た。

幾年か経^たつた。千葉の方にいた私の母の妹が、藤木の家が気楽だからと荷物をおいて宿にしていた。土佐の藩士で造幣局に出て、失職して千葉の監獄の監守になり、後に台湾で骨^{こつとう}董商と金貸をした（虎と蛇の薬をもって来た）人の細君だった。——その時分^{ようや}漸く奉還金の残りが公債証書で渡されるとかいつて悦びあつていた間柄だった——氣むずかしい毒舌家の藤木さんが、一番氣のあつた女^{ひと}だった。極^{ごく}く早いお茶の水の卒業生だった彼女が学校を出て、大丸横町の岡田学校というのへ月俸金四円也で奉職したのは、私なぞの知らないころだったが、わからずやの私の母は、妹が毎日^{はかま}袴をはいて大門通りを通り、近所の小学校へつとめに来られては肩味^{かた}がせまいという理由のもとに抗議をもうしこんだ。そのた

めにあんなおじさんのところへお嫁入りをさせられたのだと、明治十何年か時代のモダン女性は、平凡に——あんまり平凡になりすぎた運命をよく嘆いていた。

ある日坂さかもと本に昼火事があつて、藤木さんは義いもうと妹の一人子を肩にして見物していたが、火勢が盛んなので義妹にも見せたくなつて呼びにかえた。自分の見世物のように、勢いよく燃えあがつている火事を眺めさせていると、根岸の方に飛火があると騒ぎだした。とつて返して見ると見当がわるい、自分たちの方角だ。おやおやと駈かけつけて見ると、住居の茅屋根かやが燃て、近所の人たちが消えていくれた。

飛火は消えた。どうやら半焼——それも戸棚の中だけですんだ

というので、狂気のように家の中にはいつて見ると、戸棚の中味だけがすっかり焼けつくして——やつと、どうにかなりかけた藤木の品ものばかりでなく、田舎からはこんで来た義妹の家財は一物も満足なのはなく、一緒にして鞆かばんへ入れておいてもらった両家の家か禄奉還金ろくほうかんぎんの書類も灰になってしまっていた。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

チンコツきり

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>